

2023年10月9日

公益財団法人

日本臨床心理士資格認定協会 御中

日本リハビリテーション心理学会
理事長 針塚 進
日本臨床動作学会
理事長 鶴 光代

「臨床心理士報」第34巻第2号の巻頭言につきまして

拝啓

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

平素より、大変お世話になっておりますこと、厚くお礼申し上げます。

このたび、貴会の会報である「臨床心理士報」(第34巻第2号)に掲載されている巻頭言につきまして、私共、日本リハビリテーション心理学会及び日本臨床動作学会は、困惑しているところでございます。

岡田康伸氏による巻頭言には、「動作法や認知療法などでは、深さを考えないらしい。が、それに満足しないで、それらの療法であっても『深さ』を心に留めてほしいと思う。」という記述があります。

両学会は、成瀬悟策のいう「臨床動作法」を中核にして、心理臨床の研究及び実践を重ねています。臨床動作法は、『からだところ』(成瀬悟策、2009)や『動作療法の展開』(成瀬悟策、2014)等でも論じられているように、こころの深さを含めてこころの全般にわたって心理支援を行う理論と技法に基づいています。

しかし、この巻頭言には、動作法は心の浅い部分にしか関わっていないという論調が展開されており、大変遺憾に存じます。固有の「療法」名をあげて「深さは考えないらしい」という文章を「臨床心理士報」に載せることは、岡田氏の考えを貴協会も追認しているというように、臨床心理士をはじめ関係者から受け止められかねません。

極めて公益性が高い貴協会の「臨床心理士報」の巻頭言に、上記の記述が掲載されたことに戸惑いをおぼえ、読者に誤解を与えるのではないかと危惧しています。

つきましては、何らかのご対応をいただきたくお願い申し上げます。

ご多用のこととは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら貴協会の一層のご発展をお祈り申し上げます。

敬具